

2024

No. 909

8 August

みちしるべ

MICHISHIRUBE



## Contents

半日の美／浜 幸寛.....	3
聖書を読んでみませんか／岡本新一.....	4
詩 「愛」／塚本貞次.....	7
神様を知ること／黒田 章.....	8
著名人と聖書 第14回 星野富弘／古賀敬太.....	12



☆当月号および過去1年分のみちしるべを、電子書籍版にてご覧頂けます。 <https://e-michishirube.com>

# 半日の美

浜 幸寛



みなさんは、ツククサという花はご存知でしょうか？ 白と青と黄色のコントラストが美しい、手作りのブローチを思わせる何とも愛らしい小さな花です。もしかしたら、どこかで見たことがある方もおられるかもしれませんが、実はなかなか見ることが難しい花でもあります。その理由の一つに、咲いている期間がわずか半日であるという事情があります。ツククサは早朝に咲き、昼にはしぼんでしまう花で、まさに「露草」という名にふさわしい、はかない美を演出する花なのです。私も写真でしか見たことがありませんが、この花は雑草でもあるのです。（美しい小さな雑草の花図鑑『山と溪谷社より』）

天地を創造し、このツククサをも創られた唯一の

神、主は、たとえ半日のいのちであっても、また雑草として踏みつけられるような存在であっても、心を留め、大切にしておられるお方です。聖書の中にこのようなみことばがあります。

「草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装ってはいませんでした。今日は野にあつて、明日は炉に投げ込まれる草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、どんなに良くしてくださることでしょう。信仰の薄い人たちよ。」

（ルカの福音書12章27、28節）

誰の目にも留められることなく半日でおれていく雑草の花ですら、神はソロモン以上に装ってくださいます。まして、神の形に似せて創られた私たちを神はどれほど装い、こころに留めておられるでしょうか。神の御子イエス・キリストのいのちと引き換えにするほどに私たちを愛し、大切にしておられる神の存在に気付いていただければ幸いです。

# 聖書を読んでみませんか

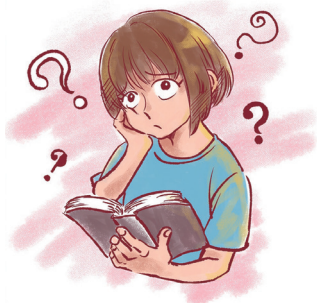
岡本新一

皆さんは、聖書を読んだことがありますか？聖書は3千以上の言語に翻訳され、世界で毎年1億冊以上が発行されています。日本においても、年間50万冊が人々の手にわたっています。また、聖書はギネス・ブックにも認定されており、人類史上最も多く発行されている世界のベストセラーとして知られています。

ところで、聖書というどのようなイメージを持たれますか？「宗教の本」、「難しい本」、「分厚くてとっつきにくい本」などと思われる方が多いかもしれません。しかし、聖書は私たちが普段使っている言葉に知らず知らずのうちに影響を与えているほか、私たちの毎日の生活に必要な知恵や力を与えてくれる本なのです。さらには、私たちの心の重荷を取り除くことができる書物でもあります。

このように、聖書は私たちにとって、実はとても身近な書物です。この聖書について、少しご紹介したいと思います。

1、私たちの生活に深くかかわっている書物である



多くの人は気づいていないかもしれませんが、私たちが使う言葉や表現の中には、聖書に由来するものがたくさんあります。例えば、「目からうろこが落ちる」という表現があります。これは、新約聖書の中で、サウロ（のちのパウロ）がイエス・キリストに出会い、目が見えなくなった後、再び見えるようになる場面に由来しています。（使徒の働き9章）また、「砂上の楼閣」という表現は、基盤がしっかりしていないものがすぐに崩れることを教えますが、やはり新約聖書の中の、有名な「山上の垂訓」の一節に由来しています。（マタイの福音書7章26節）

この他にも「豚に真珠」、「狭き門」、「笛吹けども踊らず」など、私たちが普段何気なく使っている言葉の中には聖書に由来するものが少なくありません。聖書を読むことで、これらの表現の背景や意味をより深く理解することができます。

## 2、人生の道しるべとなる書物である

聖書の中には、私たちが日常生活を営む上で役に立つアドバイスが豊富に含まれています。例えば、前述の山上の垂訓には、「人からしてもらいたいことは何でも、あなたも同じように人にしなさい」（マタイによる福音書7章12節）ということばがあります。これは「黄金律」と呼ばれ、自分がされて嬉しいことを他人にも行うことで、対人関係を円滑にし、信頼関係を育むための指針となります。また、旧約聖書の「箴言」には、「柔らかな答えは憤りを鎮め、激しいことばは怒りをおおる。」（15章1節）と書かれています。これは、対人関係において冷静で優しい対応がいかに重要であるかを教えます。

このほかにも聖書には、私たちが生きていく上で必要な知恵や指針が数多く記されており

り、人生の道しるべとなる書物といえます。聖書が長い間、世界中の人々に親しまれ続けているのは、いつの時代にあっても通用する変わることのない真理が示されているからです。

### 3、心の重荷を取り除くことができる書物である

現代社会は、多くのストレスやプレッシャーに満ちており、多くの人が心の安らぎを求めています。そのような中であって、聖書は、私たちの心の重荷を取り除き、大きな慰めや希望を与えてくれます。

例えば、「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイの福音書11章28節) というイエス・キリストのことは、疲れた心に安らぎと休息をもたらしてくれます。また、旧約聖書の「詩篇」の「主は私の羊飼い。私は乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させいこいのみぎわに伴われます。」(23篇1節) ということは、神様がいつも私たちを見守り、導いてくれるという安心感を与えます。

このように、聖書のことばは私たちが困難な状況に直面したとき、心の重荷を取り除き、希望と勇気を与え、前に進む力を与えてくれます。聖書が世界のベストセラーとなっているのは、そのことばに私たち一人一人を励ます力があるからではないでしょうか。

ご紹介したのはほんの一例ですが、聖書は私たちの生活に深くかわり、人生の道しるべとなるほか、私たちに力を与えることができる書物です。これを機に皆さんも聖書を手にとってはいかがでしょうか？

# 愛

塚本 貞次

あなたがどんな悪いことをしても  
主イエス様はあなたを愛します

あなたがどんな病があっても

主イエス様はあなたを捨てません

あなたが主イエス様を裏切っても

神様はあなたを愛しています

永遠の愛で愛して下さいます。

「いつまでも残るのは

信仰と希望と愛、これら三つです。

その中で一番すぐれているのは愛です。」

(コリント人への手紙第一・13章13節)





# 神様を知るといいうこと

黒田 章



のは、むしろ神様の愛の現れと言えます。また聖書の別の箇所には、神様についてこのようにも記されています。

「死ぬことがない唯一の方、近づくこともできない光の中に住

よく「神様を見たら信じる」という方がおられます。しかし残念ながら、神様は見る事ができません。なぜなら神様は次のように言っておられるからです。

「あなたはわたしの顔を見ることができない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」(出エジプト記33章20節)

このことばの通り、神様を見た人は生きていることができないのです。神様は全ての人を愛しておられ、死ぬことを望んではおられないからです。

ですから、神様がご自分の姿をお見せにならない

まわれ、人間がだれ一人見たことがなく、見ることもできない方。」(テモテへの手紙第一・6章16節)

このように神様を直接的に見ることはできませんが、ただし間接的に見ることはできるのです。

次のような諺があります。「この親にしてこの子あり」この意味は、子供の行動を通して親の姿を想像できるといふことです。

先日、こんな体験をしました。私は車を運転中、横断歩道では止まることを心掛けています。先日もし運転中、横断歩道があったので歩行者の有無を確認



していたところ、歩道を小学生の低学年らしき女の子が歩いていました。横断歩道に差し掛かり渡ろうとしたので私は当然、止まりました。対向車の方も気づいてくれ止まってくれました。そして無事渡り終え、それから180度向きを変えて私たちに深々とお辞儀をしてくれたのです。私はびっくりしました。横断歩道は歩行者優先で渡って当たり前なのですが、渡り終えてから深々とお辞儀をしてくれたその子供に感動すら覚えました。

私も歩行者の立場で横断歩道を渡る時、軽く手を上げたり、会釈したり、足早に渡ります。でもこの子供のように向きを変えて深々と頭を下げることはできません。この礼儀正しい子供さんを通して子供さんを育てられたご両親もさぞ礼儀正しい立派な方ではないかと思つた次第です。

「子供は親の背を見て育つ」と言いますから。その反対に悪いことばかりしている子供の場合は「親の顔が見てみたい」ということになります。

聖書の記事に「神を見たなら満足します」と言つた

人がいました。

『ピリポはイエスに言つた。

『主よ、私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。』

イエスは彼に言われた。

『ピリポ、こんなに長い間、あなたがたと一緒にいるのに、わたしを知らないのですか。わたしを見た人は、父を見たのです。どうしてあなたは、「私たちに父を見せてください」と言つのですか。』

(ヨハネの福音書14章8、9節)

ピリポはイエス様のお弟子さんで、イエス様と3年半、寝食を共にしました。父を見せてくださいとありますが、父とは創造主なる神様のことです。

ピリポはイエス様を知ることができましたが、それが父なる神さまを見たことになるということまでは思いが及ばなかったようです。

ピリポと同様、イエス様と寝食を共にした、もつとも身近な弟子であるヨハネは、晩年、このように書き記しました。

『いまだかつて神を見た者はいない。父のふとこ

るにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」(ヨハネの福音書 1章18節)

ではイエス様が神様のことを私たちに示す神の御子であるということは、何によって知ることができらるのでしょうか。

イエス様は、そもそもその誕生から、私たちとは全く違うものでした。マタイという弟子はそのことについてこう書き記しています。

「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒ににならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った。

彼がこのことを思い巡らせていたところ、見よ、主の使いが夢に現れて言った。

『ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みます。その

名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。』」

(マタイの福音書 1章18〜21節)

この記事には二つの大事なことが書かれています。その一つは、マリアは「聖霊によって身ごもった」ということです。聖霊とは、神さまの霊のことであり、命の根源である方です。処女が身ごもることなど、人間の常識では考えられないことですが、神様は全知、全能なる御方であり、神様には不可能なこととは一つもありません。

ですから処女から生まれたということが、イエス様がわれわれ人間と違う、神の御子であることの非常に重要な証拠なのです。

もう一つの大事な点は、21節の後半の「この方がご自分の民をその罪からお救いなるのです」という箇所です。

イエス様の最大の使命は、奇跡を行うことでも、良い教えをなさることでもなく、私たちを罪から救い出すということでした。

聖書の別の箇所では次のようなみことばがあります。

『キリスト・イエスは罪人を救うために世に來られた』ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。』

(テモテへの手紙第一・1章15節)

新約聖書はギリシヤ語で書かれました。ギリシヤ語で罪とは「ハマルティア(αμαρτια)」と言います。翻訳すると「外的れ」という意味です。

あなたをお造りになられた創造主なる神様のことを知らずに生きている、生き方そのものが外的れなのです。また知っていてもその方を無視して、自分を中心にして生きていること、今の生活に満足しているから救いなどいらないと思っていること、つまり神様から離れて生活をしている、こうしたもろもろの生き方を罪と言うのです。

あなたはどうかでしょうか？ 神様によって生かされていることに感謝しておられるでしょうか？ 人に感謝することはあっても、創造主である神様に感謝することなどは、まずないではありませんか。

しかし、そのような罪人である私たちを救うために、イエス様はこの世に来てくださったのです。イエス様には、私たち人間が持っている罪や欠点は一つありませんでした。この事實は、イエス様が神の御子であることのもう一つの重要な要素でもあるのです。

このようにイエス様は何一つ罪を犯すことない、完全な生涯を歩まれたにもかかわらず、私たちを罪から救い出すために、私たちの身代わりに十字架にかかって死んでくださったのです。さらに、三日目によりがえられました。

このイエス様のことを知ることが、本当の神様を知るといふことにつながるのです。そしてそのイエス様のことを伝えることが、聖書が書かれた最大の目的なのです。ぜひイエス様を通して、目に見えない神様のことと、この方の愛がはっきりとお分かりになりますように。



# 著名人と聖書（第14回）

古賀敬太

星野富弘（1946—2024）

## —いのちよりも大切なもの—

筆をくわえ、詩や絵画を書き、『鈴の鳴る道』などの詩画集を出し、多くの人々に親しまれていた星野富弘さんが、今年4月28日に亡くなられました。享年78歳でした。

ここでは、星野富弘さんが詩画集を通して私たちに問いかけてきたこと、つまり「いのちよりも大切なもの」について考えてみたいと思います。

### いのちよりも大切なもの

あなたにとって一番大切なものとは何でしょうか？ ある人は仕事と言い、またある人は家族と言いい、更に別の人はお金と言います。しかし一番多い



のは、いのちではないでしょうか。死んでしまったら終わりだ、生きていさえすれば、きっと良いことがあるとはよく言われる言葉です。たしかに、そこに真理の一端が示されています。

他方、自分のいのちを大切に生きることだけを人生の目標にしてしまうと、自分を越えた価値が忘れ去られてしまいます。私たちはただ生きるだけでなく、生きる意味を求める存在です。生きる長さではなく、生きる質が問題なのです。

星野富弘さんの詩画集『花の詩画集 鈴の鳴る道』、『かぎりなく、やさしい花々』（1986年）は、多くの人々の共感を生み、公立学校の教科書にも採用されています。その中の一つの詩に、『いのちより

も大切なもの』があります。

「いのちが一番大切だと思っていたころ

生きるのが苦しかった。

いのちよりも大切なものがあると知った日

生きているのが嬉しかった。」

この詩が発表された時、星野さんに「いのちよりも大切なものとは一体何ですか」という質問が数多く寄せられました。というのもこの詩には答えが示されていないからです。星野さんは、「いのちよりも大切なもの」をどこに見出したのでしょうか。星野富弘著『愛は深き淵より』より紹介します。

### 星野富弘さんの事故

星野富弘さんは、1946年に群馬県の現・みどり市に生まれ、群馬大学を卒業して、中学の体育の教師になります。しかし1970年6月に器械体操の跳び箱で宙返りした時に、首の骨を折る事故をし、頸髓損傷が原因で肩から下が麻痺し、用便も食事もできない状態になりました。生きる意味を見失い、何度も自殺を考えたそうです。こうした絶望的

な状態にあった星野さんが、キリストに導かれるようになります。そのためには、三つの段階を経験することが必要でした。

### 第一段階―自分の弱さを徹底して知る

人生に絶望していた時にクリスチャンの友人が、病院に星野さんを見舞いに聖書を持ってきたそうです。しかし、星野さんはその聖書を読まないで、段ボール箱に入れたままにしていました。どうしてでしょうか？星野さんは、「あいつは、苦しくて、とうとうキリスト教という神様まですがりついたのか」と言われることを恐れたからです。神様を信じるのは弱い人であって、もっと自分は強くならなければと思っていました。実際、星野さんのそれまでの歩みは、自分の身体を鍛えて、強くなるという意思に貫かれていました。

しかし気管切開して口も開けなくなった時に、自分の弱さを痛切に感じるようになります。彼は、「自分の弱さを自分で認めることが恐くて、無理に強くなったと自分をごまかして生きてきたのではなかつ

たか」と自問自答し、「もしかしたら、私はほんとうの自分の姿にもどったのではないだろうか」と述べています。これは大事な気づきです。

## 第2段階 — 自分の醜さを知ること

星野さんは病院で骨折をして入院しているクリスチャン女性から『塩狩峠』、『道ありき』、『光あるうちに』を読むように紹介され、「私たちは生きていくのではなく、生かされているのです」という三浦綾子さんの言葉に心を動かされ、この時から聖書を渴きを持って読み始めるようになります。

と同時に彼は、病院でのある事を通して自分の醜さに目が開かれます。それは、スキー大会で転倒し、星野さんと同様に、四肢が全く麻痺してしまった中学生の「ター坊」の存在でした。星野さんは、当初自分と同じ不自由な状態にあった彼を励ましていました。が、やがて彼が腕も足も動くようになり、自分で排泄をし、食事ができるようになった時、その回復を喜ばず、強い嫉妬を抱いたのです。

後に星野さんは、この時の罪の自覚を次のように

詩で表現しています。

「体のどこかが人の不幸を笑っている。

ひとのしあわせがにがにがしく

『あいつもおれみたくに動けなくなればいい』

と思ったりする。

体の不自由から生じたひがみだろうか。

心の隅にあった醜いものが、

しだいにふくらんできたような気がする。

自分が正しくもないのに

人を許せない苦しみは手足の動かない苦しみを

はるかに上回ってしまった。」

## 第三段階 — イエス・キリストの

十字架のあがないを信じる

星野さんは、本当の自分の姿に向き合うようになり、心の底に鉛のように重く溜まっている孤独や不安、罪責感に恐れおののくようになります。その時彼が、聖書を聞き慰めを与えられたのが、イエスの招きのことばでした。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたし

のもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイの福音書11章28節)

彼はこの時の経験を後に次のように証しています。「思い切つて、イエス様の名を呼び、聖書を開いてみました。そして長い間苦しみながら探していた私に語りかける言葉に会うことができました。上を向いて寝ている私の目に映るものは、天井の70枚のベニヤ板だけではなくになりました。その灰色のベニヤ板のつぎ目さえ、私たちのために血を流された十字架に思えます。楽しい時に感謝し、心の沈んでいる時、名を呼べる方が、今までになかった喜びです。」

星野さんは、十字架上で「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分で何をしているのかが、わかっていないのです。」(ルカの福音書23章34節)とご自身を十字架につける者たちのためにとりなしの祈りをされたイエス・キリストのことばを、罪人である自分のために語られたものとして受け入れ、生涯イエスの招きに従っていくことを決意します。この時こそ、星野さんが「いのちよりも大切なもの」を見出した瞬間でした。

そして星野さんは、1974年12月22日、事故が起こった4年半後に信仰告白をし、バプテスマ(洗礼)を受けました。星野さんにとって「いのちよりも大切なもの」、それはイエス・キリストというお方でした。星野さんの詩画集は、イエス・キリストの愛に満ちています。そして読者は、「いのちよりも大切なもの」を自分のこととして考えるように導かれるのです。

#### 【参考文献】

星野富弘「愛、深き淵より」

(立風書房、1990年)

星野富弘「いのちより大切なもの」

(フォレストブックス、2012年)



### みちしるべ8月号 第909号

令和6年8月1日(毎月1回1日)発行

発行所 伝道出版社  
〒183-0056 東京都府中市寿町 2-8-9  
TEL 042-366-7760  
FAX 042-366-7790

編集人 伝道出版社 編集部  
<https://dendoshuppan.shop-pro.jp/>  
印刷所 株式会社 共同印刷所



「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。」

こちらは、大変有名な平家物語の一節です。栄華を極めた平家の没落を描く物語、その冒頭において、この世の栄光はいつかの儂<sup>はかな</sup>いものであり、必ず減びる様を、響いては消えていく鐘の音や、咲いては散っていく花にたとえています。聖書にも似た一文があります。

「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。」(ペテロの手紙第一・1章24節)

ここでは、人という存在の儂さを草にその栄えを花にたとえています。しかし、こう続きます。

「しかし、主のことばは永遠に立つ」(同25節)

人の存在は儂いものですが、聖書の語る神の存在、救いの約束は永遠にあり続けることを強く語っている一節です。

聖書が語る神の存在とその救いは、私たちにとって最も大切なことです。そのことに気付かされた人たちは、時には命の危険の中においてもそのことばを語り継いできました。そして、聖書を通して、今も確かに福音が語り継がれています。この永遠が約束される良き知らせを知り、受け入れる方となりますように。(白井達也)

なお、くわしく聖書について知るために、下記の所へぜひおいでください。



昭和43年1月10日第3種郵便物認可  
令和6年8月1日(毎月1回1日)発行  
みちしるべ8月号 第909号

伝道出版社  
〒183-0056 東京都府中市寿町2-8-9

定価1部50円+税  
送料63円  
振替00140-9-27336